

第五講 浄土真宗の教判（本願力回向の信心について）

二雙四重の教判と信心

「聞其名号信心歡喜」の大經の文を釈せられるに當つて、聞くとは「仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし、是を聞と曰うなり。」と釈せられ、次に、信心歡喜を釈して、

「信心と言ふは、則ち本願力回向之信心なり。歡喜と言ふは、身心悅豫之貌を形すなり。」

と表わされた。信心とは、本願力回向の信心である。自力によつて捏造されたものでなく、名号を聞くことによつて、自然に開發する、如来本願力の回向の信心であり、歡喜とは、その信心が心にも身にも顕現する、悅豫の相に外ならない。本願力回向の信心を以て、生命とし、最要とすることは、浄土真宗、聖人の宗教の根本眼目である。

私は、この聖人の第一提唱を頂くに當つて、信卷本にある、二雙四重の教判について述べたいと思う。これは、先には、殊更これを飛して、今に譲つておいたのである。御本典に聖人云わく、

「しかるに菩提心に就いて二種有り。一には豎、二には横なり。又豎に就いて復二種有り、一には豎超、二には豎出なり。豎超、豎出は権実、顕密、大小之教に明せり。歴劫迂廻之菩提心、自力の金剛心、菩薩の小心なり。亦横に就いて復二種有り、一には横超、二には横出なり。横出は、正雜、定散、他力の中の自力の菩提心なり。横超は、斯れ乃ち願力回向之信樂、是を願作仏心と曰う。願作仏心は即ち是れ横の大菩提心なり。是を横超の金剛心と名くるなり。横豎の菩提心、其の言一にして其の心異りと雖も、入真を正要と為す。真心を根本と為す。邪雜を錯と為す。疑情を失と為るなり。欣求淨利の道俗、深く信不具足之金言を了知し、永く聞不具足之邪心を離る應きなり。」

以上は、六要のいわゆる「二雙四重の釈」の文である。聖人は二雙四重の教判をたてられた。教判とは、一宗の祖師が、自らの宗とする一点に立ちて、釈尊一代の教、八万四千の法門を分類し整理することである。客觀的には、經文そのものの整理分類であるが、主觀的には、その自証の世界に於いて、自らの頭の中を分類し整頓することである。別してこれを言えば、聖人は、既に他力信心の絶対的価値を示された。今暫く、これをその相對的世界に移して、一代諸經と比較して、他力真宗の眞実を示されるのである。

聖人の判釈は、世にもまた勝れたものである。その教判にして勝れているということとは、その頭の中、自証の世界が、極めて明瞭であつたことである。何もかも眞実に思われる頭も、何もかも信ぜられない心も共に、智慧の眼のなき相である。譬えば一匹の蠅が、罅に止まり、金に止まるが如く、そこに何等の価値認識の眼のない者に、教えに対する判釈があろう。聖人は實に、如来回向の信心の智慧によつて、一代の教行証を判釈して、一糸乱れず、一切の教のおかるべき位置を決定せられた。これ即ち、二雙四重の教判である。

菩提心の問題

聖人は、信巻において、

「凡そ大信海を按ずれば・・・唯是れ不可思議、不可称、不可説の信樂なり、譬えば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の藥は、能く智愚の毒を滅するなり。」

と他力信心の絶対性を主張して、一切衆生は、ただ平等に、他力本願によつてのみ救われることを示したまい、しかして後、

「しかるに菩提心に就いて二種あり。」

と、菩提心に対する問題を提起せられた。菩提心の問題は、法然上人の御在世より、一つの大問題となつたのであつた。即ち法然上人は『選択本願念仏集』に於いて、大經の三輩往生の文を釈せられるにあたり、上輩の文には、「其の上輩とは、家を捨て欲を棄て沙門と作り、菩提心を発し、一向に専ら無量寿仏を念じ」とあり、中輩の文には「行じて沙門となり大に功徳を修すること能わずと雖も、常に無上菩提の心を発し、一向に専ら無量寿仏を念ずべし。」とあり、下輩の文には「諸の功徳を作すこと能わずとも、常に無上菩提の心を発し、一向専意に乃至十念、無量寿仏を念じ」とあり、注意して味読すればわかるように、三輩とも「菩提心を発す」べきことと、一向専念無量寿仏と念仏すべきことが示されてある。

しかるに、法然上人は選択集に、

「下輩の文の中に、また菩提心等の余行あり。」

「上輩の中に、菩提心等の余行を説くと雖も、上の本願の意に望るに、ただ衆生をしとて、専ら弥陀の名を称せしむるにあり。」

とて、菩提心を以て余行として、これを廃捨すべきことを教えられ、唯念仏一行のみを、往生之業念仏為本と提唱された。

ここにおいて、物議は騒然としておこつた。由来、菩提心は、仏教に於いてはその宗派の如何を論ぜず、いやしくも仏道を求めて成仏を要期する限り、必ず発心修行すべきことを強調した。発菩提心を説かざる経なく、必要とせざる人なく、この仏道修行の終始に互つて一貫すべき発菩提心を撥無せられたかに見えたが故に、浄土念仏流に對して、痛烈なる非難攻撃、反駁は加えられたのである。その第一人者は梅尾の明慧上人であつた。

明慧聖人は、法然上人の『選択本願念仏集』に對して摧破の創を奮われたが、其中心問題は、実にこの菩提心の問題についてである。即ち、選択集の上に許すべからざるものとして挙げられた過失十六ヶ条の中、第一、菩提心を以つて往生極樂の行とせざる過。第二、弥陀の本願の中に菩提心なしという過。第三、菩提心を有上小利とする過等、念仏門が、専修念仏を主張するの余り、仏教の最要たる菩提心を撥無するものと断定して、非難攻撃の矢は主として、この問題を中心として放たれて来た。

発菩提心こそ聖道門の生命である。ただに聖道門のみならず、これを、余行として廃捨せんとするものは、浄土門の祖師の釈をも無視せんとするものではないか。視よ、天親菩薩の浄土論には「発菩提心は願作仏心、願作仏心は度衆生心」と説かれてある

ではないか。道綽禪師は、『安樂集』に於いて発菩提心に四番の解釈をなし、善導は、『観経疏』に「各発無上心」と云い、「同発菩提心」と示して、発菩提心を勧めたまうている。しかるに、『選択集』には、その巻頭に「往生之業念仏為本」と標して、菩提心を撥無するは何事であるかと、駁撃の鋭鋒を専修念仏に向けられて来たのである。之に對して、法然門下の人々よりは、斥破の書を著す者あり、当時教界に於ける聖浄二門の対立抗争の中心問題は、実にこの問題を中心として転回されたと言つてよい。しかるに聖人は今や、この大問題を提げて起されたのである。

「しかるに菩提心に就いて二種有り。一には豎、二には横なり。」と。
これよりこの未だ解決せられざる大問題に對して、根本的解決を与えたまわんとするである。

横豎

「しかるに菩提心に就いて二種有り。一には豎、二心は横なり。」
聖人はまず、問題となつた菩提心を豎と横との二種に分類せられた。豎とは自力のことであり、横とは他力を意味するのである。聖人の真意を以て言わしむれば、この問題の紛糾は、畢竟ずるに、菩提心そのものに二種あることを明らかにせざるが為である。元祖法然上人が廃捨したまうは、自力の菩提心であり、七祖の勧めたまうは、他力の菩提心である。その立て分けが明瞭にされないが為に起つた諍論である。浄土門必ずしも菩提心を撥無するのではない。菩提心をその根本眼目とする聖道門必ずしも、菩提心の問題について究竟的解決を与えたものではない。而して、我が聖人に至つて、この問題に根本的解決を与えられたのである。

しからば、まず「横」「豎」の語は、聖人の独創によるのであるか。あるいは既に使われ来たつたものであるか、語の出拠を尋ねれば、己に『大無量寿経』に、

「必ず超絶して去りて安養国に往生することを得よ。横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉づ。」とあり、「横」の文字は他力を意味することに使われている。更に善導大師の『序分義』には、

「共発金剛志、横超断四流」——共に金剛の志を發して、横に四流を超断せよ。——と初めて横超の文字を見るに至つたのである。これ大經の横截五悪趣の横と、超絶の超とを結合して生まれたものである。既に横を持つて他力を表すが故に、豎をもつて自力をあらわすものとせられたのであろう。

なお、存覚上人の『六要抄』には、択瑛法師の「楽邦文類」第四に載せられたる横豎二出の釈を以つて、聖人の釈の根拠としている。即ち択瑛法師の文を、六要に引用せるものに云く、

「豎出とは、声聞は四諦を修し、縁覚は十二因縁を修し、菩薩は六度万行を修す。これ地位を渉る。譬へば及第するものは、須く自ら才学あるが如し。また歴任転官するものは須く功效あるが如し。

横出とは、念仏して浄土に生ぜんことを求む。譬えば、蔭叙（父祖の功德によつて位に叙せられること）の功は、祖父の他力によりて、学業の有無を問わざるが如し。又恩をおよぼすこと普博にして、功は国王に由りて、歴任の浅深を論ぜざるが如し。」

とあり、即ち豎出とは、菩薩及び二乗が、世間の人のその才学の力相応に地位を得、任官出世するが如く、自力精進の世界を意味し、横出とは、父祖及び国王の恩によりて位を得るが如く、恩徳によつて救われる、他力念仏の世界を示されたものである。

存覚師は『歎徳文』の中にも、

「就中一代蔵を披いて、経・律・論・釈の肝要を擢んで六卷の抄を記して、教行信証書類と号す。彼の書に述ぶる所、義理甚深なり。いわゆる、凡夫有漏之諸善、願力成就の報土に入らざることを決し、如来利他の真心、安養勝妙の楽邦に生ぜ令むることを呈す。殊に仏智信疑の得失を明かし、盛りに浄土報化の往生を判ず。兼ねては、復た択瑛法師の釈義に就いて横豎二出の名を模すと雖も、宗家大師の祖意を探りて、巧みに横豎二超の差を立つ。彼此助成して権実の教旨を標し、漸頓分別して長短の修行を弁ず、他人未だ之を談ぜず、我師独り之を存す。」

と其の功績を讃えられた。

「択瑛法師の釈義に就いて横豎二出の名を模すと雖も、宗家大師の祖意を探りて巧みに横豎二超の差を立つ」と云い「他人未だ之を談ぜず、我師独り之を存す。」というもの、誠に簡にして、真に聖人の真面目を表彰された文といふべきである。

超と出

横とは他力を表わし、豎とは自力を意味すると言つた。しかるに、この横と豎とを更に二種に分ちて、豎超、豎出、横超、横出の四種とせられた。

超とは、何を意味するのであるかと言へば、超とは、頓悟、頓証の意であつて、長4時を要せず、修行の階段をふまずして、一念の端的に成就せられる菩提心を意味するのである。

出とは、漸悟漸証の菩提を表わされたものであつて、長き時を費し、修行の歷程をふんで至る菩提心を示せるものである。

故に、豎超とは、自力の頓証

豎出とは、自力の漸証

横超とは、他力の頓証

横出とは、他力の漸証

を意味することとなる。以下これ等四種を略説すれば、次の如くである。

豎超

豎超（自力頓証）とは、信巻には「自力の金剛心、菩薩の大心なり」と示されてある。自力によつて金剛の菩提心を発起して、頓極頓速に仏果を得ようとするものであつて、世にいわゆる、即身成仏、即身是仏の証悟をいうのであつて、『愚禿抄』には「頓教に就いて二教二超あり。二教とは、一には、難行聖道の実教なり。謂わゆる仏心（いわゆる禪宗のこと）真言、法華、華嚴等之教なり」とあり、即ち教より言えば、実大乘たる華・天・密・禪の自力円頓教のことである。『愚禿抄』には、超について「一には、豎超、即身是仏、即身成仏等之証果也。」とあり。教は、華・天・密・禪といわゆる四家大乘に分けられるも、その目ざす処は、この父母所生の肉身さながらに、頓

極頓速即身成仏の証果を頓証しようとする智慧の宗教である。聖人はまずこれら実大乘の聖道門に対しても、頓教としての立場を一応は与えたまうのである。

豎出

豎出（自力漸証）とは、信巻の文に「豎超、豎出は権実、顕密、大小之教を明せり、歴劫迂廻之菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり。」とある中「歴劫迂廻之菩提心」と言われるのがそれである。歴劫迂廻とは、長き劫を歴て、廻りまわって修行成就する菩提心である。

『愚禿抄』には「漸教に就いて、復二教二出有り。二教とは、一には難行道、聖道権教、法相等、歴劫修行之教也。」と言ひ、「二出とは、一には豎出、聖道、歴劫修行之証也。」と説かれてある。法相宗等の如き、権大乘の教がそれであつて、三大阿僧祇劫の長時修行によつて、五十二の階位を向上して、仏果に至ると説かれるものがそれである。この自力漸証の世界を豎出と言われる。

以上、豎超豎出、自力漸教と自力頓教の中には権教、実教、顕教、密教、大乘教、小乗教等、いわゆる聖道八万四千の法門が悉くこの中に入るのである。

横出

「亦横に就いて復二種有り、一には横超、二には横出なり。横出は、正雜、定散、他力の中之自力の菩提心なり。」（信巻）

横出（他力漸証）とは、他力念仏に対して正信を発し得ず、念仏しつつも仏智疑惑⁵の自力の垢を混入する者のことである。「他力の中之自力の菩提心なり。」と言われる所以である。『愚禿抄』には、この他力漸証（漸教）について、

「二には易行道、浄土要門、無量寿仏觀經之意、定散三福九品之教也。」

と説き、横出を説いて、

「二には横出、浄土、胎宮辺地懈慢之往生也。」

と示されてある。以上によつて領解せられるが如く、他力中の漸教とは、觀無量寿經の世界のことである。即ち要門、第十九願の人のことである。即ち觀經には、定善（息慮凝心、心を静めて善き心に住し、觀法すること）散善（麁悪修善）の雜行、三福（觀經を見るべし）九品（上品上生より下品下生まで）の教えが説かれてある。

かかる自力の善根に執着して、自己を知らず、如来を知らぬ者は、念仏するも、自力我慢の毒を混入するが故に、真実の浄土に往生する身とならずして「胎宮辺地懈慢之往生」とて、化土に往生するのである。

横超

豎出

自力漸証 法相宗等の権大乘

超

自力頓証 華・天・密・禅等の実大乘

横出

他力漸証 浄土門中、觀經要門

超

他力頓証 浄土門中、大經弘願門

先に、豎出、豎超、横出、と述べて来た。次は残されたる横超についてである。横超とは実に、我が他力真宗のことである。

聖人、信巻に説きて云く、

「横超とは、これ即ち願力回向の信樂、是を願作仏心と曰ふ。願作仏心は即ち是れ横の大菩提心なり。是を横超の金剛心と名くるなり」と。

これ誠に、千古万古にわたる大決判である。永遠の真実道の光闡である。究竟真実の明言である。ここに至つて不滅の白道は開顕せられたのである。

又、『愚禿抄』には「頓教に就て、復二教二超あり」と掲げ、二教を説く中に、

「二には易行浄土本願真実之教、大無量寿経等也」

と言ひ、二超を説く中には、

「二には横超、選択本願、真実報土、即得往生也。」

以上の説において我等は、易行、浄土、本願、真実之教、大無量寿経、選択本願、真実報土、即得往生、願力回向之信樂、横超の金剛心等、極めて重要なる幾多の深広なる大文字を見出すのである。

横超とは他力頓証

「横」とは、他力を意味し、「超」とは、頓極頓速、円融円満の証果を意味する。であるから、横とは自力を表わすところの「豎」に対する言葉であり、超とは、階次を上つて至り、時を追うて進む漸証、即ち「出」に対する文字である。されば横超とは、6絶対他力によつて回向成就する速疾なる証のことである。

もし『教行信証』の中、教に約してこの横超の何たるかを示せば、『愚禿抄』にいうが如くである。云わく

「本願一乗は、頓極・頓速・円融・円満之教なれば、絶対不二之教、一実真如之道也と應に知るべし。専が中之専なり、頓が中之頓なり、真の中之真なり、円の中の円なり。一乗一実は大誓願海なり。第一希有之行也。」

本願一乗を説ける大無量寿経は、絶対不二之教であり、一実真如之道、即ち唯一絶対の道を示せる真実の中の真実教である。この唯一の真実教こそは、頓極、頓速、円融円満の証を開覚せしむるが故に、頓極頓速円融円満之教と云われるのである。専中の専、頓中の頓、真中の真、円満中の円満、大乘中の大乘、一乗中の一乗は、実に、弥陀の大誓願をおいて外にないのである。

なお「第一希有之行」と細註が入っているのは、行に即して表わされたのである。従つて、本願一乗は「頓極頓速円融円満之行」ということが出来、「頓極頓速……之信」「頓極頓速……之証」ということが出来るのである。第一稀有の教であり、第一希有之行、信、証である。

横超とは願力回向

「横超とは、斯れ乃ち願力回向之信樂、是を願作仏心と曰ふ。」

横とは他力、超とは頓証を意味するのであった。しかして今これを其の成就の大因に溯つて言う時、「横超とは斯れ乃ち願力回向之信樂」である。即ち、衆生が如何にして、生死を解脱して、開覚成仏することが出来るのであるか、それは如来の一切を名号の中に撰在せしめて、願力を以て衆生に回向したまうが故である。如来本願の回向によるが故に、横と言われ、その本願の回向そのままに微塵の自力我慢の不純分を混入せず、一念に如来の大善大功德を全領し、第十八願の信心の智慧を成就して、成仏の決定成就するが故に「超」と言われるのである。

横によらねば超は出て来ない。絶対他力によるが故に、頓証が凡夫さながらの上成就するのである。しからば、何故に、如来本願の他力によりつつも、横超ならぬ、横出の世界が出て来るのであるか。これ即ち、他力念仏の世界にいつつも、仏智を疑惑し、定散の自力を混入し、正雜の分別が出来ず、凡夫の浅智を以て、広大なる大智海を計らうが故である。広大なる仏智を疑いつつも、なお、しかしながら、己が善根をたのみ、念仏をたのんで、如来の救いを要請せんとする者、即ち、十九願の衆生である。しかも如来は、かかる衆生を、自力を雜入するが故に捨ててかえりみないとなれば、到底一切衆生は一人として救われないことを哀愍して、かかる衆生をも、もらすまじと、第十九願、修諸功德之願（又、至心発願之願という）を建てられたのである。群生海を誘引せんが為に説かれた觀無量寿経等の世界がそれである。先に示すが如く、『愚禿抄』に、

「二には易行道、浄土要門、無量寿仏觀經之意、定散三福九品之教也。」

「二には横出、浄土、胎宮、辺地、懈慢之往生也。」

とあり、信巻には「横出は、正雜、定散、他力の中の自力の菩提心なり。」と示されたが如く、他力の中に自力を構え、本願力をたのまずして、定散二善をたのもうとするによつて、横超の他力門は方便の横出、要門となるのである。誠に、横超の眞実門は、如来の大弘誓願によつて、本願力さながらに開かれたる仏凡一体の境地である。

横超とは即得往生

「二には、横超、選択本願、眞実報土、即得往生也」

とは『愚禿抄』のお言葉である。これ、横超を、その証果の上より示されたものである。すでに述ぶるが如く、横超を教えの上より言えば、

「二には、易行浄土本願眞実経等也」であり、行の上より言えば、

「大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。斯の行は即ち是れ諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり、極速円満す、眞如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。」（行巻）この大行は、第十七願諸仏称名之願によつて成就せる浄土眞実之行なるが故に、「第一希有之行」（愚禿抄）と言われ、今これを、行信の因よりおこる、証果の上より言わば、「横超とは、選択本願眞実報土、即得往生也」と言われるのである。これ即ち第十一願の必至滅度の益を示されたものである。横超は、如来選択の本願による純粹信の獲得によつて衆生の上に開ける。

「諸有の衆生、其の名号を聞いて信心歡喜し、乃至一念せん。至心に回向したまえり。彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得、不退転に住せん。」

衆生は、静かに沈黙して善知識を通して、名号を聞いて信ずる一念に、即得往生する。前念命終、後念即生、自力の迷情一念に滅んで、大行の大功德、衆生の機に回向顯現される時、時を隔てず、処を変えず、一念速疾に、往生成仏の大因を決定獲得して、久遠の惑業、一念に滅して即得往生するのである。これ即ち「横超」である。

されば、横超とは、絶対他力によつて成就する頓極頓速円融円満之証果である。自力によらずして、如来光明名号の巨弾によるが故に「横」と言い、生死流転を粉碎して余す所なく、往生成仏の大因を獲得して余す所なきが故に、「超」と言われる。真実の教も、行も、信も、遂にこの横超の頓証を成就せんが為である。故に、第十八願の世界は、

「設い我仏を得んに、国中の天人定聚に住し、必ず滅度に至らざば、正覚を取らじ。」
(第十一願)

身は生死海中にありつつ、浄土国中の人となり、正定の菩薩位に定まる。現生正定聚の断言は聖人にあつては、動すべからざる自証の必然的帰結であつた。

横超と真実報土

「二には、選択本願、真実報土、即得往生也」

聖人の宗教にあつては「真実報土」は、誠に、究竟的帰依の対象であり、往生成仏の処であり、涅槃界であり、生活の彼岸であり、往相の帰結であり、還相の根拠であり、遂に宗教の全てである。即ち、純粹なる第十八願の世界は、真実報土に必然不離相即の交渉を持ち、行者は真実報土に往生し、浄土は遙かに三界の迷妄を勝過しつつも、浄土より現実生死にはたつきかけて、菩薩道の聖野を展開して、尊き一切を生死界に成就するのである。往還二回向の理がそこにある。もしそれ衆生にして、理想の彼岸に背をむけて走り、あるいは、浄土と絶縁されんか、そこには無明の大野、生死の苦海のみ出現するであろう。

されば、自力念仏の横出を説ける文字には、

「二には横出、浄土胎宮辺地懈慢之往生也」

と示されてある。胎宮といい、辺地懈慢界というは、全て、衆生の疑心無明を雜入するが故に、自覚の世界全からず、その自力混入に依じて、浄土界中にありつつ、戒められるのである。化土（胎宮、辺地、懈慢界のこと）にあるものは、真実に仏法僧の三宝を知らない。大慈悲を知らず、得ず、有情利益の心を更に持たない。疑惑和讃にいわく、

「自力称名のひとはみな 如来の本願信ぜねば

うたがう罪のふかきゆえ 七宝の獄にぞいましむる。

自力諸善のひとはみな 仏智の不思議をうたがえば

自業自得の道理にて 七宝の獄にぞいりにける。

七宝の宮殿にむまれては 五百歳のとしをへて

三宝を見聞せざるゆゑ 有情利益はさらになし」と。

以上によつて知るべきが如く、人生において、三宝に帰依して、真実に念仏を領解せざるものは正定聚の身とならず、正定聚の菩薩位に得道せざるが故に、化土に誠められるのである。

誠に、真実信心の行者は、願力成就の真実報土、真仏土に往生し、自力念仏の行者は化土に往生し、三毒煩惱のみの者は生死界を離れず。されば、今日の生活に於いて、無量光明土たる真報土に必然の關係ある生活、化土につらなる生活、生死に流転すべき生活と、三相の生活あることを知るべきである。

実に横超とは、速に、易行によつて、証大涅槃の妙果を得させられる絶対他力の世界のことであった。真実なる教、行、信、証の世界であった。誠に、横超は、絶対不二の教えを聞くことに初まるのであった。多くの行者は、あるいは信心歓喜を獲ることにあせり、あるいは易行の文字に囚えられ、あるいは往生浄土に急にして、易行道が、本願真実の教を聞くことによつてのみ成就することを忘れ、本末を顛倒して、遂に、求めて何ものを得ざるに至るのである。行者誠に心すべきである。真実の教に絶対帰依する時、必然に、行、信、証の世界は開けて来るのである。

願作仏心

横超とは、誠に、横とは絶対他力、超とは、頓極頓速の証果をいうのであった。しかしてかかる他力頓証は、聞其名号信心歓喜と、他力信心によつて衆生の機に成就されるが故に「横超は斯れ乃ち他力回向之信樂」と言われるのであった。この如来本願力回向の大信心こそ、生死を横超してやがて大涅槃を証する心である。

しかるに聖人は更に「願力回向之信樂、是を願作仏心と曰ふ。」と説かれ、なお更に「願作仏心は即ち是れ横の大菩提心なり。」と解釈せられた。これを如何に解釈すべきであろうか。

憶うに今、この願作仏心の文字を挙げられたことは、他力の信心が菩提心であることと釈せられんが為に外ならないであろう。即ち他力の信心は願作仏心と言われ、願作仏心は大菩提心であるが故に、信心は菩提心であると断言せられるのである。然らば、まず信心が何故に願作仏心と言われるのであろうか。

信と願

他力の信心とは、ただ漠然と如来を信じてさえいけばよいと言うが如く、そこに、念仏相続もなく法味愛樂もなく、求道聞法の志もない、平面無味無力無内容のものでなく、不滅の力一貫相続して大般涅槃の証果に至る、往生の一道を念々相続して浄土に願生せんとする願があつて動くのである。芽を切つたる若木の生命の延びゆくが如く、一度湧き出でたる泉の自然に湧くが如く、信心の内奥には本願力さながらの力があつて動くのである。この願即ち、本願文にあつては欲生我国と示され、成就文にあつては、「至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転」と説かれ、やがて、天親論主は、願生安樂国と言われ、更に鸞師によつて、願生の一心を願作仏心と言われたのである。

願作仏心とは、仏に作らんと願心である。一心こそは仏の本願力によっておこる大信心であるが故に、一心はそのまま仏に作らんと願ずる心である。仏の本願より発起する信心は、又仏に作らんと願をはらむのである。それ故に、信心はそのまま願作仏心である。

願作仏心と度衆生心

正像末和讃に聖人の言わく

「浄土の大菩提心は 願作仏心をすすめしむ

すなはち願作仏心を 度衆生心となづけたり

度衆生心といふことは 弥陀智願の回向なり

回向の信樂うるひとは 大般涅槃をさとるなり

如来の回向に帰入して 願作仏心をうるひとは

自力の回向すてはてて 利益有情はきはもなし」

既に述ぶるが如く、信心は願作仏心であつた。しかるに今の和讃によれば『すなはち願作仏心を、度衆生心となづけたり。』『度衆生心といふことは、弥陀智願の回向なり。』とあり、これによつて領解すれば、仏の大悲本願を、度衆生心と言われ、この度衆生心によつて、衆生の願作仏心を回向成就したまうのである。しかるに、天親和讃によれば、

「尽十方の無碍光仏 一心に帰命するをこそ

天親論主のみことには 願作仏心とのべたまへ

願作仏の心はこれ 度衆生のこころなり

度衆生の心はこれ 利他真実の信心なり」

とあり、これによれば、一心の信心は願作仏心であり、願作仏心は、そのまま度衆生心である。度衆生心とは、衆生を済度して成仏せしめんと意である。以上によれば、願作仏心も、度衆生心も、共に衆生の信心の徳そのものである。

仏もと法蔵因位において、四十八の大願を発したまうに当つて、四十八願悉く「設い我仏を得たらんに・・・何々成就せずば・・・誓つて正覚を取らじ」と誓い、願作仏心によつて五劫永劫を一貫したまう。而してその願作仏心は、そのまま「十方衆生・・・若し生れずば正覚を取らじ」と、一切衆生を救わんと、度衆生心をその内容となしたまうた。菩薩の願作仏心、即ち自利成就は、そのまま度衆生心、即ち利他成就である。自利利他の自利を願作仏心といい、自利利他の利他を度衆生心という。

自利によつて利他を成就し、利他によつて自利を満足す。自利の智慧によつて利他の大悲は発起せられ、利他の大悲によつて自利の智慧は円成する。されば願作仏心はそのままだ衆生心である。度衆生心はそのままだ願作仏心である。この自利利他一如の円融円満の徳は、そのまま南無阿彌陀仏の大道に円具されて、正覺の全てとなつたのである。

かかる大功德を撰取する南無阿彌陀仏の名号は、そのまま衆生に回向せられるのである。衆生は本願によつてこの名号を回向せられ、名号を獲得することによつて信心を成就するのである。信心はかくの如く、如来本願の回向なるが故に、如何なる下品下生の衆生の機に於いて発起すとも同一の信心である。而して、如来の願作仏心、度衆生心によつて発起したる信心なるが故に、第十八願、弘願の信心には、自然にその体徳として、願作仏心、度衆生心の徳を内具するのである。これ即ち天親和讃に、

「尽十方の無碍光仏、一心に帰命するをこそ、

天親論主のみことには、願作仏心と述べ給え。

願作仏の心は是れ、度衆生の心なり、

度衆生の心は是れ、利他眞實の信心なり。」

と、説かれる所以である。是を要約すれば如来の願作仏心と度衆生心とによつて衆生の一心を発起し、一心は、願作仏心、度衆生心の徳を具するのである。

しかるに今この信巻には「願力回向の信樂、是を願作仏心と曰ふ。」と願作仏心のみ出されたのであろうか。

これ、先に引く正像末和讃の如く「度衆生心ということは弥陀智願の回向なり」と、度衆生心を仏に約して説かれたものであつて、仏の上にある度衆生心によつて、衆生の心に願作仏心を発起せしめたまうと見られるのである。即ち仏にあつては度衆生心、衆生にあつては願作仏心である。しかしながら、機法もとより一体なるが故に「すなはち願作仏心を度衆生心となづけたり」と言われるのである。されば、願作仏心のみを挙げられるとも、願作仏心は必ず度衆生心をはらむのである。行者は唯、自力をすてて、願作仏心に生ききれば、その自行の一心には、必ず度衆生心と化他の徳を内具するのである。されば和讃に

「如来の回向に帰入して 願作仏心をうるひとは

自力の回向すてはてて 利益有情はきわもなし。」

と説かれるのである。自力によつて衆生に回向せんとその思いをすてて、願作仏心に生き、自利成就すれば、利益有情即ち度衆生のはたらきは、願作仏心の体徳として自然に顕現するのである。

しかるに世の多くの行者は、一寸の自行をも成ぜずして、直ちに一尺一丈の利他を成就せんとし、他人の世話にのみ奔走して、己が世界の浅薄を知らず。

磁石は鉄を磁石とする、然れども針を引いて磁石とする寸にも足らざる磁石を以つて、一尺の軟鉄に向うも、これを磁石とすることは不可能である。百千貫の大磁石に

して初めて、百千貫の鉄を自ら磁石とすることが出来るのである。浄土に向つて帰依し、本願力によつて自ら願作仏心（上求菩提）を成就すれば、行者自らは、その意欲行相なくとも、自然に度衆生心（下化衆生）のはたらきを具足するのである。これ、然しながら、本仏の本願力の自然の回向によるものである。されば行者は自力の回向をすてて、唯一心に願作仏心に生きぬくべきである。

かくの如く、真実の信心は、願作仏心（度衆生心）なるが故に、信心は「大菩提心」と言われるのである。菩提心とは、上求菩提、下化衆生、即ち願作仏心即度衆生心と、自利利他一如の願心をいうのであるが故に、信心は誠に、如来心によつてしかるのである。もし、それ、この願作仏心、度衆生心の徳を具せざる信心ありとすれば、これ如来回向の真実信心ではなくて、自力煩惱の変形にすぎないのである。

師資相承發揮

已に述ぶるが如く、吉水の法然上人、浄土宗を独立せしめ、選択本願念仏集には、菩提心についての細判なく、唯、菩提心を自力として所廢の行とせられたが故に、世の誤解するところとなり、梅尾の明慧上人の如きは『摧邪輪』等の書を著して、菩提心を撥無するものとして、これを論難攻撃、まことに急なるものがあつた。しかるに我が聖人は、師の幽意を開き、如来本願の大信心海を光闡して、この論難を折伏せられたのである。吉水の上人が廢すべしと説かれたのは、自力の菩提心であつた。廢せしめたまうは、正しきものを立てんとしたまうのである。正しきものとは他力の大菩提心である。他力弘願の信樂は、真実純粹なる菩提心である。横超の大菩提心であるこれ我が聖人の断言である。しかし、これ全く聖人の独断ではない。彼の和語燈一には、

「浄土宗ノココロハ浄土ニ生レント願ウヲ菩提心トイフ」

とあり、これによつて見れば、吉水の上人已に、聖道の菩提心と浄土の菩提心とを分たれ、その差別昭然たるものがあつたのである。

聖人は今、菩提心を、横（他力）と、豎（自力）とに大別し、更に、横超、横出、豎超、豎出と、四重の教判によつて分ち、遂に他力横超の信樂を以て、願作仏心（度衆生心）なりとし、それ故に信心こそは真実なる大乘の大菩提心たることを説破せられたのである。

勸誠

「横豎の菩提心、其言一にして其の心異りと雖も入真を正要と為す、真心を根本と為す。邪雜を錯と為す、疑情を失と為るなり。欣求浄利の道俗、深く信不具足之金言を了知し、永く聞不具足の邪心を離る應きなり。」（信卷）

本節は、四重の教判の結びとして、上を承けて、不要なるものを簡びすてて、最要の法を定め、行者を勸試したまうのである。

入真為正要

「横豎の菩提心、其の言一にして、其の心異りと雖も、入真を正要と為す、真心を根本と為す。」

先に出ずるが如く、横超、横出、豎超、豎出、全て菩提心と言われるが故に、菩提心の言は同一であるけれども、其の意は異っている。今、この文の「雖」の文字について、昔から一つの疑義がある。この雖の字は「惟^{これ}」という字の間違ひではあるまいかというのである。即ち、化身土巻に、

「専修、その言は一にして、其の意惟異り」というのがある。ここも、それと同一で、「横豎の菩提心、其の言一にして、其心惟れ異なり」ではあるまいか、というのである。そこで、これを「横豎の菩提心、其の言一にして、其の心異り」というのと「其の言一にして其心惟れ異なり」というのでは、それ以下の文の意が変わって来る。

今「雖」とあるままに「横豎の菩提心、其言一にして其心異りと雖も、入真を正要と為す、真心を根本と為す」とすれば、入真とは、聖浄二門にわたる意となつて、入真とは「無上正真道に入る」こととなる。無上正真道とは、阿耨多羅三藐三菩提の訳であつて、いやしくも仏道志す限り、この無上菩提を求めないものはない。無上正真道を因の相に於いて獲得すれば菩薩であり、果に至れば仏である。入真とはまことにこの無上正真道に入ることである。浄土真宗に於いて言わば、大信心こそは無上正真道に生きた相である。されば先には「願力回向之信樂、是を願作仏心と曰う。願作仏心は即ち是れ横の大菩提心なり。」と言われた所以である。

「入真を正要と為す。」無上正真道より外は正要ではない。もし仏道に入らんとして無上正真道を中正とせず、至要としないならば、それは仏道ではあり得ない。彼の仏道の名に於いて、迷信祈祷を成し、病氣平癒等を仏に請求するが如きは、入真を正要とせざるものである。随つて「真心を根本と為す。」、必ず、永遠の真実心を根本とすべきである。

「邪雑を錯と為す、疑情を失と為るなり。」

聖道門にせよ、浄土門にせよ、邪雑を錯とするのである。邪とは偏邪であり、雑とは、煩惱を雑えること、いわゆる雑毒である。この偏邪雑毒こそは、二門共に錯とするところであり、許さざるところである。又「疑情を失となす」ことも同一である。仏法の大海には信心を以て能入とする。疑情を以て入るは、宝の山に手なくして入るに喩えられている。

是を要するに「横豎の菩提心、其の言一にして、其の心異りと雖も、入真を正要と為す、真心を根本と為す。邪雑を錯と為す、疑情を失と為るなり」と、「雖」を強くひびかせば、この勸誡は、聖浄二門に及ぶものとなり、聖道門にせよ、浄土門にせよ、真に入り、真を根本となし、邪見雑毒を以て錯誤となし、疑いを以て失とすることは同一であるということになり、これによつてまず仏教の通念を示し、横超の他力も亦、かかる仏道の根本眼目を満足せしむるものたることを示されんとせられるのである。而して、かかる仏教根本の眼目は、横超、横出、豎超、豎出、豎出、豎出の菩提心において、

果して完全に衆生のものとなるのであるか、横超他力の大菩提心こそは、誠に一切衆生をして無上正真の道を得しむる唯一の大乗であり、誓願一仏乗である。

願海への帰入

もし「雖」の文字を響かせず「横豎の菩提心、其の言一にして其の心惟れ異り、入真を正要とす、真心を根本と為す。邪雑を錯と為す、疑情を失と為るなり。」とすればその全体の意味が異つて来る。即ち、横、豎、共に菩提心という文字は使つていても、その意は異つている。

「入真を正要と為し」とは、入真とは、帰入真実であつて、真実とは弥陀の弘願、帰入とは信心、本願海に帰入することである。「真心を根本と為す」とは、真心とは、信心である。如来心こそ、菩提心の根本を為すものである。この真実の信心に帰入することを正要、即ち中正要領とするのである。これによつてのみ、菩提心は一切衆生に於いて、具体化せられるのである。

「邪雑を錯と為す」とは、邪雑は自力の善根のことである。聖道の諸善は、此土入証の営み、この万行諸善を往生の行因となして、自力回向の心を混入することを、邪雑というのである。未だ仏智によつて照破されつくされざる僣慢自力の定散心が、この邪雑の錯を繰り返すのである。これ如来の真心を根本とせざるものである。したがつて、迷の根本たる疑惑の迷情を滅し得ないものである。「疑情を失と為すなり。」仏智に対する疑情こそは、誠に一切を失わしむる唯一の失である。

念仏者への勸誡

「欣求淨利の道俗、深く信不具足之金言を了知して、永く聞不具足之邪心を離る應きなり。」

聖人は信卷及び化土卷に、涅槃經の文を引いて仰せられた。信不具足の文に云わく、「又言わく、信に復二種有り、一には聞従り生ず、二には思従り生ず。是の人の信心、聞従りして生じて思従り生ぜず、是の故に名づけて信不具足と為す。復二種有り、一には道有りと信ず、二には得者を信ず、是の人の信心、唯、道有りと信じて、都て、得道之人有りと信ぜざらむ。是を名づけて信不具足と為すといへり。」

又聞不具足の文を引いて云わく、「涅槃經に云わく、云何名づけて聞不具足と為る。如来の所説は十二部經なり、唯六部を信じて未だ六部を信ぜず、是を名づけて聞不具足と為す。復是の六部の經を受持すと雖も、読誦に能わずして他の為に解説するは、利益する所無けん。是の故に名づけて聞不具足と為す。又復是の六部の經を受け已りて、論議の為の故に、勝他の為の故に、利養の為の故に、諸有の為の故に持読誦説せん、是の故に名づけて、聞不具足と為すとのたまへり」と。

この両文は聖人の最も尊重せられる所、念仏の道俗、この千古の金言を体解して、明信仏智すべきである。信心具足せざるは何故か、一も聞不足であり、二も三も遂に聞不足である。聞不具足之邪心によつて、信不具足の迷路はある。謹んで頂戴して真に聞信すべきである。

